

浄土

monthly
JŌDO

2012 **11** November



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

京福電鉄綱索線

ケーブル八瀬駅

こうさくせん

駅は出発駅と終着駅の2駅しかない綱索線は京都市左京区のケーブル八瀬駅からケーブル比叡駅に至る京福電気鉄道のケーブルカー路線です。通称、叡山ケーブル。叡山電鉄叡山本線、叡山ロープウェイとともに京都市内から比叡山山頂へのルートを形成し、高低差は561m。ケーブルカーとしては日本最大です。冬季は運休。元旦から3日間だけ延暦寺への初詣客のために特別運行。その期間外に鉄道系交通機関で比叡山を目指すには、大津側からのルートである通年営業の坂本ケーブルを利用することになります。

11月

浄土

2012/11月号 目次

法然上人と平家の人々②	講演＝石丸晶子	2
会いたい人 麻実れいさん③	関 容子	12
響流十方	林田康順	20
連載小説 渡辺海旭	前田和男	24
江戸を歩く第47回	森 清鑑	34
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

法然上人
讃仰会
講演概録

平成二十四年六月二十二日 於 増上寺慈雲閣

法然上人と 平家の人々

第二回

東京経済大学名誉教授

石丸晶子

時は一一七五年というとき、清盛が死んだのが一一八一年ですから、まだ平家繁盛の真っ最中です。平家でなければ、平家によらなければ何事も前に進まないという時代に法然上人は比叡山から下山されました。

その後、信空も山をおりて、法然上人が亡くなるまで、そして亡くなったあとも信空自身死ぬまで、法然上人の第一弟子として法然上人に仕えます。法然上人が亡くなったあとも、京都のお弟子たちを取りまとめる最大の柱でありました。

一一九八年、建久九年に法然上人が病氣になられたときに「もつごきしゅうもん没後起請文」が書かれます。そのとき信空に対して、「彼は誠実、真実な人で、私に尽くしてくれた」ということが書かれています。それで、信空にたくさんのご自分の持っているものを、財産というものがあるとすれば、何とかの草庵とか、どこそことか、そういうものを信空に贈るといのように遺言されました。

しかし、そのとき法然上人は回復され、しばらくは元気になられて、その後四国に流罪になられ、そして一二二二年一月二十五日に亡くなりました。

私がここで皆様に考えていただきたいのは、山をおりられた法然上人に、信空さんは何もしないで、「じゃあさようなら」で、それで済んでいたろうか。時は、都ではもう平家一門でなければ何事も進まない時代です。

仮定で見えていくと、いろいろな歴史がつながって参ります。

まず、その大前提になる仮定は、信空は山をおりた法然上人のことを自分の姉妹でもある領子に何らかの依頼を、経済的援助、そしてこういう立派な上人様が山をおりられ、ご自分が開いた悟りによって、人々に口称念仏くしんねんぶつを授けて一切衆生救済の道を、比叡山の中の

人たちだけではなくて、一般衆生に広く伝えたい、その願いで下山されるけれども、経済的にも何につけてもお困りであろうから、法然上人のことをどうかよろしく頼むと、そういうことを言ったに違いないと思うのです。

ただ黙って見ていて、手をこまねいて知らないふりをしていたはずはないと思うのです。何しろ、続いて信空自身も山をおりて、法然上人の一番弟子としてずっと仕えるのですから。

そう仮定すると、最初に申しました、伊藤唯真親下が指摘された、「平重盛は法然上人年来の檀那であった」という聖光房弁長の『浄土宗要集』の記述もわかるのではないでしようか。

そして、この領子という人は、平家一門の女であり、平家一門の人と結婚しただけでなく、皇室にも絶大な力を持っていました。

最初に領子がどうやって皇室に近づいたかという点、夫の妹が滋子シゴです。この方は建春門院という女院号を持たれて、とにかく後白河上皇からものすごく愛された人なのです。領子はこの建春門院滋子の女官になります。女房になって、皇室に上がります。

建春門院滋子は後白河上皇の最愛の妃でした。それで、その領子に信空は法然上人のことを依頼したに違いないと思います。すばらしいみ教えで、皇室の方々にも、この私の兄弟子がこういう新しい教えを、二十五年間の苦悶の末に回心されました。一度お姉さんも、（何しろ二人は義理のきょうだいですからね）聞いてみてはどうか、というようなことを言ったに違いないと思うのです。これは仮定ですが。

しかし、こう推測、仮定すると、弁長が言っていることもつながってきます。とにかく

いろいろなことがつながってくるわけです。

いろいろなことの一つとして、五条大納言邦綱くにつなという人がいます。藤原兼実の日記『玉葉』にも出てくるのですが、清盛はこの邦綱を信頼すること深く、政治のことは何によらずこの邦綱に相談して、「邦綱のような臣下はこの世に二人としない」と、清盛は日ごろ言っていたと書かれています。

さらに、「玉葉」を書いた兼実も、この邦綱という人は、身分は低かったけれども、世俗的知恵にも長けた非常に利口な人で、大富豪で、しかも人柄が非常によくて、皆から慕われた、といっています。

そして、この人の世話にならない公卿たち、公家たちというのはだれもないというほど、頼まれれば何でもする人だったといえます。だから、その死後、非常に皆が悲しんだということが書かれているのです。

さらに、兼実の日記には、この五条邦綱は亡くなる十何日か前に出家するけれども、そのときの戒師は黒谷上人であったと書かれています。

では、黒谷上人というのはだれかということになりますが、一一八一年にはもう叡空は死んでいます。伊藤唯真いとうただま下を初め、三田全信先生、さらに「訓読玉葉」を書いた高橋貞一先生はこう断言しておられます。「黒谷上人というのは、法然上人のことだ」と。

すると、この藤原邦綱は、清盛の信頼が厚くて絶大であった、その上大金持ちで皆から愛され慕われた人が、どうして比叡山辺りの高僧を臨終の床に招いて出家せずに、まだ無名だったはずの法然上人を枕辺に呼んで出家したかという疑問がわいてきます。

この藤原邦綱がどうして法然上人を知ったかという、邦綱には女の子供が四人いまし

た。成子、邦子、綱子、輔子。その四人が全部、成子は六条天皇の乳母、邦子は高倉天皇の乳母、綱子は建礼門院の乳母、それから輔子は安徳天皇の乳母で、平重衡の妻。大納言だになんご典侍すけといつて非常に有名な女性でした。

そのようにして女の子供たち皆が宮中に上がって、それぞれの天皇に乳母として仕え、さらにこの輔子という人は平重衡の妻でさえありました。

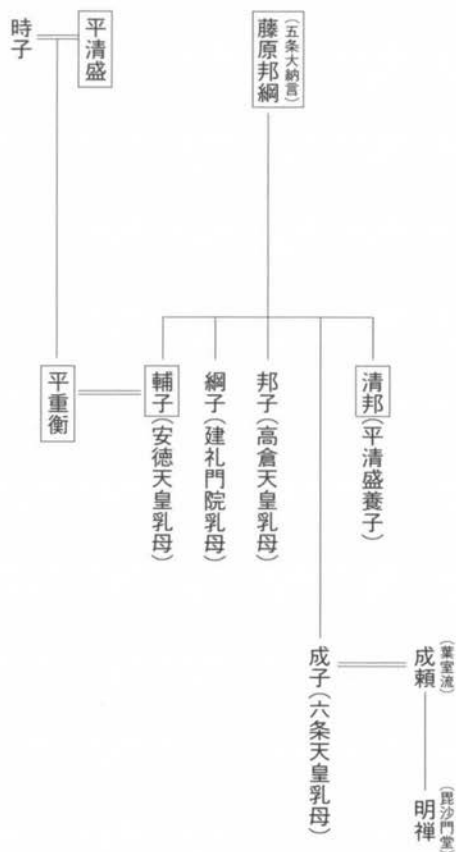
したがって、この邦綱を法然上人に出会わせたのは平家の人々であつたろう。あるいは自分の娘たちであつたろうと、わたくしは思うのです。

まず、信空の義きょうだいの領子が平家一門の人です。何しろ非常に気の強い、ナンパ一ツのやり手だつたということは申しました。一門意識の強い人でしたから、平家一門の人々に、信空に依頼されて法然上人を紹介したと思います。そこでたびたび講筵が開かれ、講筵の座が設けられたと思うのです。

さらに、この領子は皇室にずっと、建春門院、建礼門院、安徳天皇と皇室の方々に仕えていましたから、自分が仕える建春門院とか建礼門院、それから安徳天皇、まだ安徳天皇は赤ちゃんですから、お話はできなくても、とにかく皇室関係の人々にそれをお話したに違いありません。

そして、先程申し上げました輔子という人も、領子と同じく安徳天皇の乳母です。当時、身分の高い人は、乳母というの一人ではなくて、三人も四人もいたわけですから、領子は同じ乳母同士の輔子に法然上人のことを話したに違いありません。

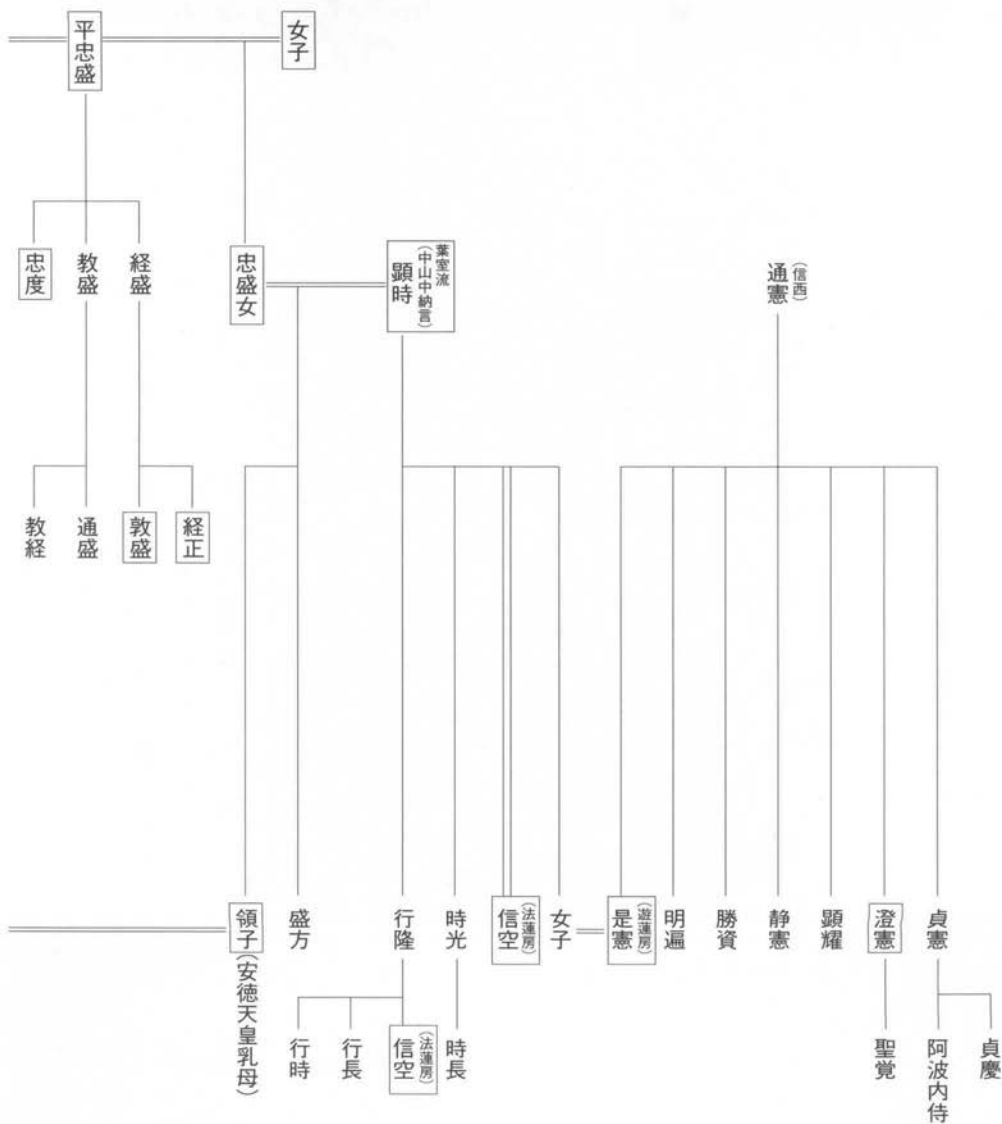
それで結局、お父さんの邦綱は娘たちを通して法然上人を知っていたし、また平清盛も、何しろ股肱こぶくの臣で、非常に信頼が厚く、邦綱に勝る家臣はいないということをしばし

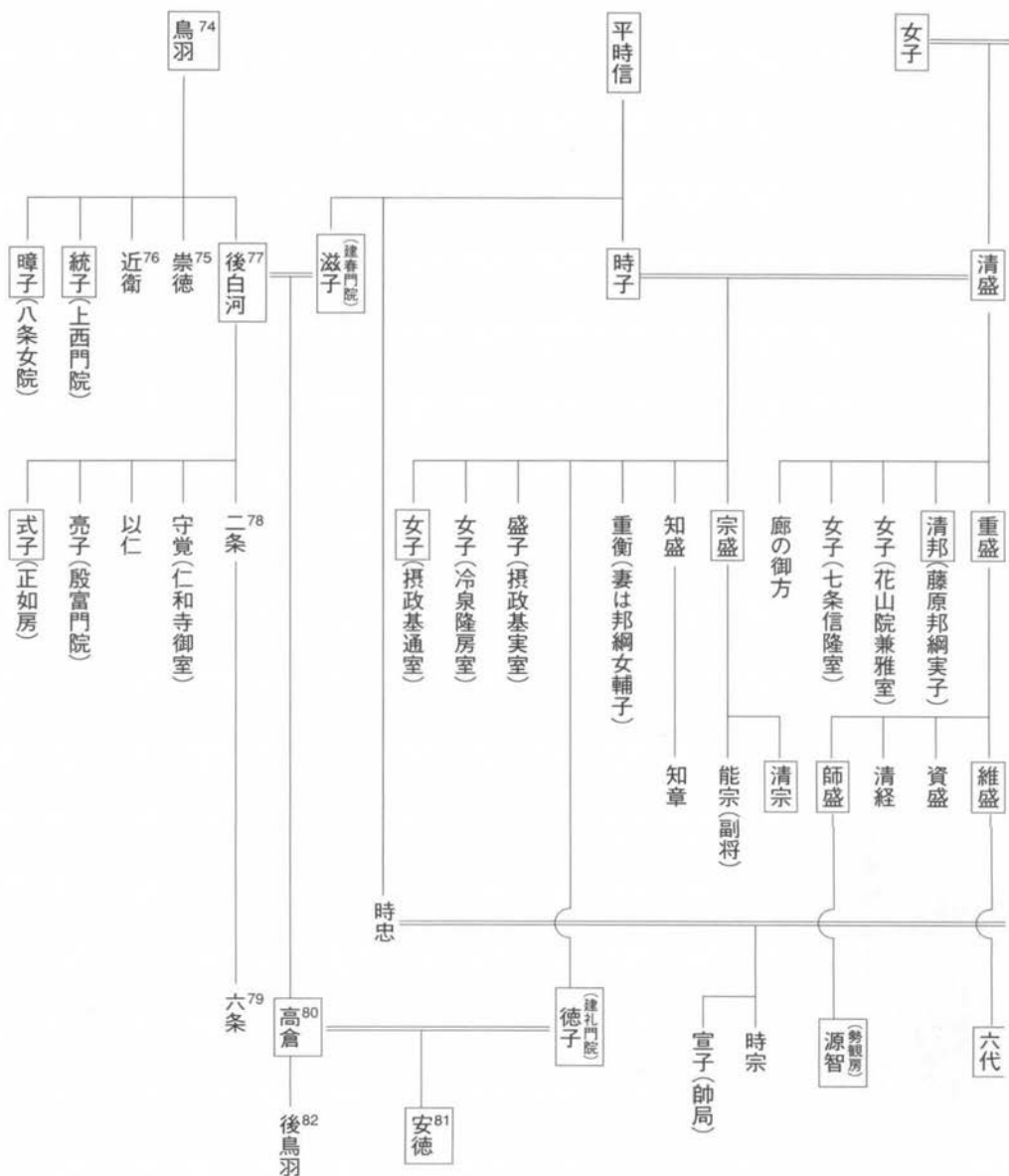


ば言っていたと言われますから、清盛からも新しいみ教えである法然上人のことを聞いていたことでしょう。

清盛からも、そして娘たちからも、二つの方面から法然上人と出会う道というのはあったわけで、私は、邦綱が臨終の床で受戒するけれども、そのときの人が法然上人であった

略系図





ということは、そういう法然上人と信空、領子、平家、皇室の人々という一連のつながりを非常に明瞭に示していると思うのです。

次に、領子と『平家物語』の作者について申し上げたいと思います。

澄憲の兄弟の顕耀、それから信空の実の兄弟である行長、それから信空の従兄弟である時長、この方たちはいろいろな史料に、平家物語作者のナンバーワンというように書かれているのです。

そうすると、『平家物語』がどうやってできてきたかということを見たいのですが、信濃前司行長が盲目の琵琶法師生仏に琵琶で語らせるために平家物語をつくったと、『徒然草』に兼好法師が書いてあるのが非常に有名です。

しかし、史料を調べていきますと、信濃前司行長という人は存在していません。そうではなくて、下野前司行長しもつけのぜんじというのは本当に存在して、この信空の弟なのです。行長なのです。だから、信濃前司行長というのは下野前司行長の間違いであろうというのが、今学会では定まったと言っているでしょう。

では、『平家物語』はどんな過程を経てできていったのでしょうか。

平家は一族二十年間の栄耀栄華を尽くしていました。やがて、頼朝が伊豆で旗揚げする。それを聞いて清盛が、「私の死後は供養する必要はない。ただ頼朝の首を私の墓前に添えろ」と言って熱病で死んでいく。そして富み栄えていた平家一門が滅亡するという大変な騒ぎです。戦場になった西国筋だけではない。全国津々浦々、至るところでいろいろな悲しい話、悲話が伝わっていたでしょう。

式子内親王のお歌にこういう歌があります。「伝へ聞く袖さへぬれぬ浪の上夜深く澄み

し四つの緒の声」。四つの緒というのは琵琶のことです。式子内親王は後白河上皇の第三皇女ですから、皇室の人です。

都にいて、伝え聞いた。その話を伝え聞いただけでも、心で泣くだけでなく袖さへ涙で濡れてしまった。

それはどうしてかという、波の上、平家は都を追われて海上を漂うわけでしょう。二年近い間、陸に上がることができないのです。でも、すべての平家は都の栄華を忘れられずに、一ノ谷で敗北するまでは、身分の高い男の人たちは衣冠束帯をつけ、女たちは十二単を着て、何しろ源氏は、熊谷次郎直実ではないけれども、もう鎧甲冑に身を固めて、相手を殺そう、殺そうと、一人でも多く殺すということをしているときに、平家は一ノ谷に行つて、青葉の笛を吹いたり、琵琶を鳴らしたりしていたわけです。

後に後白河法皇大原御幸の折、建礼門院が上々にも語ったところによると、一ノ谷までは皆、都と変わらない姿をしていて、雑兵たちに働かせていた。しかし、一ノ谷以降は女も十二単なんかでなくて、筒袖とか、そして男たちは、今で言う鹿革なんかを手には巻いたりして、鎧甲冑を身につけたとあります。

それで一年半の間、陸に上がることができず、海を漂った。喉が渴いて水を飲みたくなる。水は船の周りに満々と漂っているけれども、飲むと塩水でしょう。だから、喉が今以上に焼けつくようになってしまう。食料もない。あちこちでもおめき叫ぶ女たち、男たちが苦しみもだえているさまは、もう六道をさまよっているようだった。地獄をさまよっているようだったということを、切々と話すところがありますが、本当にそのとおりの状況だったでしょう。

(つづく)

連 載

会いたい人 関 容子

麻実れい
さん

③



撮影／タカオカ邦彦

近ごろの麻実さんは母親役も演じるようになった。宝塚の男役のイメージからはちよっとかけ離れている。

「共演の若い男の子にもそういう感じがあるらしくて、どうして母親として僕を自然に抱けるんですか？　なんて訊かれたことがあるの。だってこれでも息子二人の母親ですもの、って。義理の息子ですけれど」

麻実さんの結婚は四十五歳のとき。お相手は同世代（一十年前）で再婚だが、一流企業の代表取締役。フランス人の妻を亡くしたばかりで、ハーフの可愛らしい男の子が二人いた。

「私はもう結婚はしなくていいと思ってたんです。実家に近い麹町に住まいを用意し、一人暮らしをつらぬこうと準備万端整えていました。父を亡くし、姉達が嫁ぎ、そして母も……。その寂しさの中で気がついたら彼が私の側にいてくれました。」

母が亡くなる前に彼を紹介できた事が幸わ

せでした。何だか母がとても喜んでくれて嬉しそでした。母にはわかっていたのかもしれないですね、この人と結婚するだろうと」

夫となる人は、芸術一般に深い理解を示す家庭に育ち、素養の身についた人で、麻実さんの演劇もときどき観に来ていた。

「宝塚時代の私を観ていなくて良かった。ひげを付けたレッド・バトラー（『風とともに去りぬ』）なんか観ていたら、絶対申し込まなかったと思いますけどね（笑）。」

姉が子供達を幸わせにできないようなら結婚はしてはいけませんと、私もそう考えてました。独身を謳歌しすぎたせいかな、結婚に対して不安もありましたが、でも主人と子供達がその不安を取り除いてくれました。出会いから結婚までゆつくりとした時を持ったせいでしょうか、安心して結婚、そして同時に母親になりました」

麻実さんの一生懸命な俄ママぶりが、健気でおかしい。



『冬のライオン』で平幹二郎さんと共演し、夫婦役を演じた麻実さん。

「急に二人の子持ちになって、どうしたらいい？　って友だちに相談したら、男の子なんて御飯さえしつかり食べさせときゃいいのよ、って言われて。毎朝早起きして、お弁当箱に御飯パンパンにしてつぶれるくらい詰めこんで、玉子焼なんか作ったりするんだけど、今日も卵の力が入ってたぞ、とか、いくら何でも御飯詰めすぎるぜ、とか言いながら、きれいに食べてくるのが嬉しかった。PTAにも出席して、そうすると役員が回り持ちなんですね。すみません、時間がなくて、って言ったら、みんな忙しいんです、って言われてしまつて、でもおかげ様でほかの方が助けてくれました、感謝〜です！」

男の子たちは麻実さんを「ターコ」と呼ぶ。「二人のお母さんはあくまでも亡くなられた御母様、この関係性を大事にしました。彼らにとつては、たったひとりの愛するお母様、私とは仲間。私は、男子寮のおばさんみたいなもので、何か困った事があれば相談に来る

だろう、その時、一緒に考えれば良いや、この位の関係性・距離感が良かったんじゃないかと。

でも怒る時は奥様の代役。厳しいですよ！悪いことは悪いと、分からせないとね。体力がいります！

主人は自分に対しては厳しい人ですけど、優しいですネ。何より価値観が同じというのがよかったですね、二人三脚最高の相棒で、親友であり、夫であります」

麻実さんは神田明神のすぐ近くで生まれ育っているだけに、信心深い。

「玉三郎さんとベニサン・ピットで『サド侯爵夫人』を御一緒したときに、私の次の舞台、『マクベス』のお話が出て、気をつけなさいよ、結構霊がかかるからって。夢遊病の場面であつて火が髪に移ったという恐いお話をうかがいました。歌舞伎の方はそういうことをとても気になさって、『四谷怪談』のと

きはお岩稲荷とか、『菅原伝授』なら太宰府の天神様とかにきちんとお詣りにいらつしやいますよね。私もそれ以来ちよつと氣になる役をいただいた時は必ず台本を持って明神様でお払いをしていただけてます。私も実在した方を演じた時は舞台を終えてからでも行かれる所へは御挨拶に行くんです。シェイクスピアの『冬のライオン』の王妃エレノアを演じたときも、フランスのボルドーまで行きました。ドラマの中ではあんなにいがみあつたのに、エレノアは寝ながら本を読んでる姿、夫は剣を持って横たわる姿の彫像が、隣り同士で静かに眠ってました、エリザベス一世もメアリスチュアートも。大女優のサラ・ペルナル、イサドラ・ダンカンハはパリのペールラシューズ墓地にお礼参りに行きました」

墓参の話から突然、思ひは親しかった太地喜和子さんに及ぶ。

「大好きな喜和子姉さんには私の宝塚時代から可愛がつていただきました。お食事をした

りしながら、いつか一緒に舞台に立ちたいね、つて言つてましたが、それは叶いませんでした。でも一度だけ、トークショーに二人で出たことがあります。喜和子さんは白地の総絞りのお着物で、髪もきちんと結つて、とても素敵だった。控え室で、ポーンとお酒の壺を出して、飲む？ つて。いえ、終つてからでないと、と答えると、私、飲むわ、飲まないとしやべれないのよ、つて、シャイな方ですよ。飲む量は半端じゃありませんでしたね！ 大部出来上がつてゐる状態でトークが始まりました。一升ビンも共に出演です！ 茶碗酒でした。何かの拍子にお茶碗を倒してお酒をこぼしちゃつたので、私が慌てて何か拭くもの、つて立とうとしたら、大丈夫よつて、総絞りのお着物の袖で豪快に拭いちゃつて、予定時刻をとうに過ぎてても延々と終わらないトークショーでした！ 忘れられない大切な思い出でした」

太地さんが麻実さんの楽屋を訪れたとき、

何となくいつものような元気がないように感じられた。

「実はね……、ある人から櫛をいただいて公演でそれを使ったら、みんなが私の楽屋に近寄らなくなつて、間いつめて聞いたら、気味の悪いこと言われてさあ、いやだから親しい御住職に持つてつてもらつてお払いしたの、だから、もう大丈夫なのよ。でも髪飾りはもらわない方がよいよ、恐いからつて。その後くらいですね。喜和子姉さんが伊豆の海はで亡くなったのは、『唐人お吉』をなさつたときですけど、下田のお吉さんのお墓に手を合せに行かれなかつたと聞きました。何度か予定を立てたのに、その度に用事が入つてしまった、と。とても残念ですね」

麻実さんに存分に家庭の味を堪能させてくれた二人の男の子も今はそれぞれ家庭を持つて独立した。近ごろは半年に及ぶ旅公演にも参加しているという。

「平幹二郎さんと御一緒した『冬のライオン』のときですね。平さんとは『グリークス』で共演したときに、いつか平さんの主宰する幹の会の公演に出てほしいとおつしやつて、私の空くのをずっと待つてくださつて実現しました。私はさつき言つた王妃エレノアで、平さんの王によつて牢獄にずっと幽閉されてて、クリスマスとか何かのときだけ出してもらえるんだけど、顔を合わせれば取っ組み合いの喧嘩ばかりというへんな夫婦。でも年老いたときに二人がやつと真実の夫婦に戻つて、寄り添つて笑顔で終幕を迎える、というとてもいい芝居でしたね。平さんと御一緒させていだいて、夫婦役を六か月間も演じられて、すごく楽しかったです。そして大変勉強になりました」

それにしても半年の旅公演は長い。以前、舞台女優は旅が多いせいで結婚できない、という嘆きの声を聞いたことがあった。

「私も息子たちが独立するまでは、それはあ

神田明神近くで生まれた麻実さん。少女の頃からお参りしている明神様には女優になってもお世話になっている。



りませんでした。結婚して家族の中にいると、自分のことばかり考えてられないし、また仕事で忙しいときに限って家族に何かあったりする。でも今は主人と二人、わがままを聞いてもらいました。自分の時間を持つのも時には大切ですね、お互いに！ 巡業中は一人で行動するのが好きなんです。仕事じゃないと仲々訪れることが出来ないような地方の景色を眺めながら散歩して、ふらりと居酒屋に入ったりする。それでちよつと孤独を感じると、帰える家があるから待っていてくれる人がいるから、たまの一人も楽しいんですよね！」

最近の麻実さんは、ロック・ミュージカル仕立ての『ボクの四谷怪談』（橋本治・作、蜷川幸雄・演出）に、民谷伊右衛門の母おくまの役をわざと野暮ったい洋装でたくましく楽しげに演じたりしている。

「私は本来、怖がりで、不器用で、口下手ですから、毎回様々なキャラクターと、その言葉を与えられ、それで開放されて発散できる

のが何より刺激的です。今回も、初めて出会った若者たちの中で、いろんな発見があつて、すごく勉強になります」

これから年齢と共に、どんな新境地が開かれるのだろうか。

麻実さんが晴れやかに言う。

「舞台に立つたら、お客様の魂と交錯することが出来るんですもの。こんな楽しいこと、やめられない」

（この項終わり）

弥陀の本願を決定成就して、極樂世界を莊嚴したてて、御目を見まわして、わが名を称する者やあると御覧じ、御耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜昼聞こしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずという事なし。されば撰取の光明はわが身をすて給う事なく、臨終の来迎は虚しき事なきなり。

(法然上人「或人に示す詞」)

阿弥陀さまはその本願のお誓いを成就し、極樂世界をつくりあげられました。そして、その御目を見まわして、わが名を称える者はいないだろうかとお覧になり、御耳をかたむけて、わが名を呼ぶ者はいないだろうかと昼も夜もお聞きになられているのです。それ故、たったひと声のお念仏であつても、阿弥陀さまが気が付き下さらないことありません。それ程までにして極樂に救い導こうとする阿弥陀さまの光明が、あなた一人をお見捨てになるはずもなく、臨終に阿弥陀さまが来迎されることが偽りであらうはずもありません。

御名を呼ぶ、御名に応えて

「フレ、フレ、お父さん！」 応援する息子さんの声…。

最後は涙に… 棺から離れなくて… 「おとうさん」って。

7才の息子さんのこと、お父さんはこれからも守り続けてくれるよ。

復元納棺師・笹原留似子さんは、目閉じ・口閉じなどの軽度の復元から、交通事故や転落事故などで亡くなられた損傷の著しいご遺体の復元まで、日夜取り組んでおられます。そうした中、昨年三月一日に発生した東日本大震災による巨大津波に呑み込まれ、ひどく損傷した三〇〇人を超えるご遺体を復元し、ご家族との最期の対面を叶えるボランティアも続けてこられました。笹原さんの活動は、NHKスペシャルでも放映され、大きな反響を呼びました。生前の笑顔の写真とご遺体にかすかに残る笑いじわを頼りに何時間もかけて懇切丁寧に復元された方々は、皆、悲しいけれども、短い時間だけでも、ご家族との最期の別れを安らかな微笑みの中で過ごすことができるのです。

東日本大震災で被災にあい、復元されたご遺体のお顔を笹原さん自ら筆を執って描いた絵と、家族との最期の別れの場面を切り取った言葉とを収録した『おもかげ復元師の震災絵日記』（ポプラ社）には、目の前に笑顔で眠りについている、かけがえのない大切な方の名前を呼ぶ光景が描写されています。

「お母さんだ！おかあさん！」復元後に対面してもらった時、娘さん達が大きな声で泣いた。／「お父さん、お父さん、ごめんね…」奥さんが大きな声で泣いた…。／「とうちゃん！」6才の息子さんの声が、大きく安置所にひびいたね…。／「ああ、お母さんだ！」子供さん達が、棺の傍でひざまづいて大きな声で泣きました。／「パパ、さようなら…」小さな娘さんの涙…。「さようならはさみしすぎる…」またね！にしようよ…」ママがそう言ったね。「パパ：またね…。」／「父ちゃん！父ちゃん！ボクだよ！父ちゃん！」仮安置所に息子さんの声がひびいた…。／「お母さん、お母さん…」娘さんの声はどんどん小さくなって、大粒の涙にかわった。／「お母さん、お母さん、おかあさん！」何度もお母さんをお母さんの声は、今でも耳に残っている…。／「おばあちゃん：おばあちゃん！」小さなお孫さんの手が、何度もおばあちゃんの頬をたたく…。

目の前に横たわる大切な方の名前を精一杯呼び続ける姿からは、愛しい方向けた、言葉にならない、実に複雑な心の叫びが、私たちの胸に強く響いてきます。なるほど、普段から何気なくしている名前を呼ぶという行為ですが、名前を呼ぶ際、呼ぶ人は呼ばれた人の容姿や声はもとより、その方の心持ちや人

柄などを含めた全人格に向けて呼びかけていることが分かります。とりわけ、それがかげがえのない大切な方との今生の別れであった場合、その思いはより強く、より大きくなっていることは言うまでもありません。そして、ある意味では、旅立つて行く大切な方の名前を呼ぶという行為こそ、遺されたすべての人に平等に許された、最高の愛情表現なのかも知れません。

そのあたりの消息やありのままの人々の機微を手取るようにご存じだったお方こそ阿弥陀さまに他なりません。だからこそ阿弥陀さまは、「わが名を呼ぶ者を必ずわが浄土に導こう」とお誓いになり、法然上人は、その阿弥陀さまの救いの働きを冒頭のご法語を通じて見事にお示しになられたのです。

もちろん、お浄土に先立たれた方々も、私達のお念仏の声をお聞き下さっていることでしょう。そして、かけがえのない大切な方に向けた真摯な思いをしつかりと受けとめられた方々は、阿弥陀さまと共に、こちらの世界に遺してきた愛しい方々のことを、お浄土から優しく見守り続け、声なき声で応援して下さいることでしょう。あたかもそれは「フレー、フレー、お父さん！」と声を枯らせて最愛の父の名前を呼び続けた、7才の息子さんの思いに強く応えるかのよう

合掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十六回

第二部

ライオン
来江の古城遙かなり

クーデンホーフ・カレルギー伯父子との奇縁

“EUの父”の生みの父

渡辺海旭にとって生涯にわたる最重要テーマであった「労働者の救済」について記してきたが、前回をもってこのいささか重苦しいエピソードにひと区切りをつけ、今回からしばらくは、海旭と数奇な人物との出会いについて、そして考えようによっては世界の平和と安寧の根本にもかかわる時空を超えた奇縁

について語ることにしよう。

読者諸賢は、リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー伯爵という人物をご存知だろうか。

明治二十五年（一八九二）、オーストリア・ハンガリー帝国代理公使として来日していた同国名門貴族と日本人・青山ミツの間の第二子として誕生、日本名・栄次郎。第一次世界大戦後、一族が落魄するなか『汎ヨーロッパ主義』なる論争的著作をあらわし、後にその提唱が次の世界大戦をまたいでEEC（欧州経済共同体）からEC（欧州共同体）、そしてEU（欧州連合）へと結実したことから“EUの父”と呼ばれることになる。近現代政治外交史に関心のある諸賢ならずとも大いに興味をひかれる人物である。

さらに、ハリウッド銀幕の最高傑作のひとつ「カサブランカ」で、ハンフリー・ボガード演じるナチスに追われるレジスタンスのモデルとなった人物であり、イングリッド・バ

グマン演じる妻のモデルはリヒャルトが駆け落ち同然に結婚した舞台女優であるといえ、映画狂ならずとも好奇の芯に火がつくと間違いなしだろう。

そして「さらに」をもう一つ加えると、凄惨をきわめた二つの世界戦争を止揚するものとして提唱されたりヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー伯爵の『汎ヨーロッパ主義』は、いまだ世界各地で戦乱が収まらない現代にあつてなお輝きを放っているが、想像の翼を羽ばたかせれば、この究極の世界和平策に渡辺海旭が影響を与えているかもしれないといったら、わが月刊『浄土』の読者諸賢は、胸中から沸き起こる関心を禁じえず、即座に筆者にこう問いを投げ返すであろう。いったい全体、それはどこまで本当なのか、真実ならそこにはどのような経緯と根拠があるのかと。

それに答えるにはいささか時間がかかりそうである。あちらに飛び、こちらに潜ること

になるが、それは読んでのお楽しみとし、紆余と曲折の物語に、いましばらくお付き合いをお願いしたい。

それでは、リヒャルト・クーデンホーフⅡカレルギー伯が日本で生まれてから十二年後の明治三十七年（一九〇四）夏、ところは海旭の留学先の欧州へと、時計の針と舞台を戻すとしてよう。

第二回万国宗教歴史学会に参加

この年の夏、海旭に朗報がもたらされた。九月にスイスはバーゼルで開催される第二回万国宗教歴史学会に参加、研究発表する大役が与えられたのである。海旭は高揚を抑えきれずに、さっそく畏友の姉崎正治に書状をしたためた。

姉崎は海旭の一歳年下、東京帝国大学哲学科で井上哲次郎とお雇い外国人哲学者、ラファエル・フォン・ケーベルに師事、四年前に海旭と同じ讃岐丸で欧州へ留学、ドイツ、イ

ギリス、インドで研鑽を積んで、昨年海旭よりも先に帰国し母校の教授に就任していた。帝大の先生にありがちな「硬骨一途の学者馬鹿」ではなく、在学中には高山樗牛らと『帝國文学』を創刊するなど「文弱の氣」があり、それで海旭とは大いに馬があい、大洋をはさんで頻繁に手紙のやりとりを続けていた。

じきに姉崎から返信が届き、そこには興味深い情報が記されていた。

「予てより端倪すべからざるわが哲人盟友として貴兄にも紹介をしたことがある、かのハインリッヒ・クーデンホーフⅡカレルギー伯も、万国宗教歴史学会に出席するらしい。ぜひとも親交を深めたまえ」

ハインリッヒ某とは冒頭で紹介した「汎ヨーロッパ主義の唱道者」であり「EUの父」のリヒャルトの父親である。当時ハインリッヒは四十四歳。息子のリヒャルトはまだ十二歳の少年であった。

姉崎は、帝大哲学科で師のケーベルから

「意志と現職としての世界」の講読をうけて以来、ショーペンハウエルの帰依者となっていたが、ハインリッヒもまたショーペンハウエルに傾倒していた。ハインリッヒの来日を機にそんな二人をケーベルがつないで親交が結ばれ、それはハインリッヒの帰国後も続いていたのである。

姉崎ほど親密ではなかったものの、ハインリッヒは海旭にとって未知の人物ではなかった。情報源の一つは新聞だった。オーストリアハンガリー帝国代理公使が日本人女性と恋に落ちたいきさつと顛末から、四年間の赴任を終えて日本人妻と二人の子供を伴って帰国するときに妻のミツが皇后に謁見し下賜の品をたまわったことまで、新聞がこぞって面白おかしく書き立てたものだった。

こうした「かわら版情報」は当時浄土宗学本校で勉学三昧の海旭の耳にも届き、いまでも記憶に残っている。しかし、海旭の胸裡にあるハインリッヒはそんな世俗的な人物ではな

かった。もっとも印象に残ったのは、後に姉崎から得た情報だった。

それによると、この代理公使は十数ヶ国語に通じ哲学、宗教、芸術をきわめ、最後に仏典を読みたいばかりに赴任先に日本を選び、日本語を習熟してなんと大蔵経を繙読理解できるまでにいたったというのだ。それを聞かされて、海旭はすごい人物がいるものだ、と驚嘆を禁じえなかった。外国人に先んじられるとは、まだまだ修養研鑽が足りないといふを恥じたものだった。

その人物に会えるとは、それも日本ではなく留学先で会えるとは、海旭の感慨はひとしおだった。

仏教諸派の和合をめざす

さらに姉崎が「貴兄が幼少のみぎり勤めていたと聞いている博文館も、時には読むに値するものを出しているようだ」と同封してきた雑誌の特集が、海旭のハインリッヒへの関

心をいつそうつのらせた。

それはかつて海旭が端山海定によって西光寺に拾われる前に一時丁稚奉公をしていた先である博文館が、日清戦争の戦勝をうけて創刊した「太陽」の第二号だった。「スエズ以东第一の総合雑誌」と豪語するだけあって、米、仏、露ら大国の公使たちを写真入りで紹介する力の入れようで、そのなかにクーデンホーフ伯が写真と共に次のように紹介されていた。

「クーデンホーフ伯とは何人ぞ、奥国公使としての伯は我之を知らず、羅馬天主教の一信徒としての伯は我之を説かず、諸教の碩学高德を一堂に会し、諸派の教を聴き異教の福音を容れ、少くとも不識の間間接に我宗教界に徳沢に及ぼせる人としては之を世に紹介せざるべからず、聞説（きくならく）、古印度のアクバー王諸教の經典を蒐集し、諸派の僧侶を宮廷に会し、比較宗教の曙光此に発せりと。

クーデンホーフ伯は固よりアクバーに及ばずとするも、伯の門には異教高僧の影を絶せず、伯の書齋には各国諸宗の經典參差相交るを見る。伯のなす所は必しも実際の宗教界に宗教心の盛ならざるを慨するが為にはあらざるべく、単に學術上研究の目的に出づるなるべしといへども、而もその結果は慶を我宗教界に及ぼす者ならざるべからず。伯の庭に集る高僧碩学は必しも宗教的感情に制せらるる人に非ず、而も伯が此等の人を一堂に会するが為に、彼等の間感情上洋々たる和合を来さん事は疑ふべきに非ず。諸教高德名僧の間に和合の会合あるいは是れ我宗教界の慶事に非ずして何ぞや。是れ余輩が特に閣下に謝する所なり。我邦の華族諸君の中にクーデンホーフ伯の如き人を出さんは何れの時を可期せん、吁。」

すなわち、クーデンホーフ伯は、一宗派に淫することなく、古代インドの經典をはじめ、諸宗派の碩学の教義をあまねく学ぶという

「比較宗教学」の先駆者である。しかもその目的とするところは単なる学術研究にあらず。宗教諸派を「和合」、すなわち一つにまとめることを目的としたものであり、これを宗教界の慶事といわずして何といおう。日本の華族貴顕でこれをよくなしうる人物が出てくるのはいったいいつのことか。そう記事は、碧眼の貴族がなしえた偉業を褒め称えていた。

どうせ下世話な雑誌だとして敬して遠ざけてきたが、こんな啓発的な記事が掲載されていたとは気づかなかった。海旭は己れの浅薄短慮を恥じた。とりわけ海旭の胸に響いたのは、「宗教諸派の「和合」」のくだりであった。後日それを姉崎に確かめると、ハインリッヒは、日本の仏教諸派の内訌・対立を知ってこれを嘆き、なんとか融和がならないものかと、公使館にしばしば仏教諸宗の高僧たちを招いては懇談を重ねた。姉崎は、帝大の学生だったが、ハインリッヒの厚い信認をうけて、日本の仏教界の重鎮たちと同席を許されたのだ

という。

海旭は碧眼貴族が試みた仏教諸派の和合に感動を覚えずにはいらなかった。それは、廃仏毀釈の荒野から仏教を再生させる根本策として福田行誡師から教え諭された「兼学の精神」と相通じるものだからだ。海旭の留学の目的も「兼学による日本仏教の再生」にあり、今回の万国宗教歴史学会の研究発表でも、まさにその必要性和喫緊性を述べようと思っていたところだった。

なんとしても、学会では、ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯と交わり、とことん話しあってみよう。ますます海旭の期待はふくらむのだった。

恩師・ロイマン教授も推奨

海旭は、大いなる期待を胸に、勇躍、万国宗教歴史学会が開かれるアルプス山麓の学術都市へむけて、ストラスブルクを発った。旅の途次、毎年南独の「黒い森（シュヴァルツ

ヴァルト」の農家でひと夏を過ごす恩師・ロイマン教授のもとに立ち寄った。ライン川を列車でさかのぼること二時間ほど、黒い森のいわれであるモミを鬱蒼と茂らせた山並みが近づくと、列車は急勾配を巻くようにして息を切らしながらゆっくりとのぼり、隧道をいくつもくぐった先の寒村の駅で教授は出迎えてくれた。

息子二人と休暇を楽しんでいた教授は、息子たちをともなつて、近くの古城へと散策に誘った後、近く居酒屋で南独名産の地ビールをふるまってくれた。

さっそくロイマン教授に「日本宗教界の現状と将来」と題する研究発表を行なうむねを報告すると、「そうか、そのテーマなら安心だ、私が助言することなどないだろう」と言っただけで話題を転じた。

「世界中から、名だたる宗教関係の研究者が参加すると聞いている。研究発表も大事だが、懇親会でしっかりと交流し刺激をうけてきた

まえ。で、どんな連中がくるのか」

「パリからはシルヴァン・レヴィにパウル・ドイセンの両博士、チュービンゲンからはリヒャルト・ガルベ教授、ウィーンからはシュレーダー教授……」と海旭が大御所の名を上げるのを老教授はうなずきながら聞いていたが、ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギーの名が告げられると、身を乗り出し眼鏡の奥の眼を輝かせた。めったにみせたことがない仕種だった。

「そうか、あの哲人伯爵がくるのか。大御所たちとは何度もあっているから、今回は今更と思っていたが、だったら恒例の夏休暇を返上しても出席するのだった。彼は学者ではないが、ある意味、学者よりも啓発的だ。厭世の気があつて、いささかとつきにくいかもしれないが、いったん言説の戦端が開かれれば談論風発してとどまるところを知らぬ。とくにショーペンハウエルと仏教との関係を語らせた第一級だ。そもそもショーペンハウエ

ルの哲学は仏教が西洋の衣裳をつけて現われたものというのが持論で、これは一聴の価値ありだ。ぜひとも知の交わりをしてきたまえ」

*

恩師から督励をうけ、黒い森の寒村を辞した海旭は、ふたたびアルプスの急勾配を上る「黒森鉄道」の車中の人となった。

おりしも秋の行楽の時節で、車中は大いにぎわっていた。海旭はいつものように三等車の席を求めた。もちろん相も変わらず貧弱な懷具合と相談したこともあるが、一、二等の貴族車両ではとても味わえない世情にふれることができるからだ。

商売人、官吏、学生、老境の避暑客と乗客もさまざま。車窓の景色を飽かず眺めるもの、旅行案内をひもとくもの、思案げに日記を記すもの、子どもにねだられて梨をむくもの、中には車窓の絶景そっちのけで現下の日露戦争の戦況について甲論乙駁するものと、まさに俗界の写し絵だった。

ロイマン教授からは「そのテーマなら私が助言することなどない」とお墨付きをもらいはしたが、内心では、たったひとりの日本人として並み居る碧眼の碩学たちを前に研究発表することに重圧を感じないといったら嘘だった。海旭としては、盲人蛇に怖じずの氣概で、あるいは清水の舞台から飛び降りる氣迫で臨もうと氣負いに氣負っていた。

しかし、列車にゆられながら車中のなかなか風景を眺めるうちに、不安と緊張はいつのまにか消えていた。そのぶんカレルギー伯との出会いへの関心がますます高まるのだった。

畏友の宗教学者・姉崎正治によれば仏教諸派の和合を策した人物。ヨーロッパ随一の仏教学者の恩師によれば、ショーペンハウエルの哲学の根本は仏教にありと断じる男。さて、いったいいかなる人物なのか、楽しみだった。

紅葉館と金色夜叉

哲人伯爵に会えるという期待感のおかげで、研究発表にほとんど重圧を感じることもなく、聴衆の拍手を笑顔で受け止めながら無事終えることができた。すべての研究発表が終了した後、主催者のはからで懇親の席が設けられた。

海旭があたりを見回してそれらしき人物をさがしていると、碧眼の巨軀が会場でただ一人の東洋人を海旭と認めて向うから近寄ってきた。軽く会釈をすると、ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギーを名乗った。

四十過ぎと聞いていたが、それより十歳はふけて見えた。もはや鋭利な外交官の面差しはなく、眼には深い懷疑と思索の色を宿した、どこか東洋の隠棲者の趣きがあった。実際ハインリッヒは、日本から帰国後、父親が急逝したため外交官のキャリアを諦め、広大な敷地をもつ片田舎の古城に隠棲、読書三昧の暮らしを楽しんでいた。

海旭は巨漢を見上げて会釈を返すと、まず

ハインリッヒは挨拶代わりに海旭が発表した「日本の仏教の現状」について論評してくるものと思い、それがきたらハインリッヒの仏教諸派の和合策を質して論を転じようと考えていたが、ハインリッヒの口からついで出たのは意外も意外な言葉だった。

「貴兄がワタナベか。クーヨークワンは健在かね」

海旭はクーヨークワンが何を意味するか思い当たらず、「クーヨークワン？」と鸚鵡返しに聞き返した。

「そう、クーヨークワンだ。姉崎の話だと、たしか貴兄はクーヨークワンのそばで仏教の研究をしていたそうではないか」

海旭はようやく推量がついた。「クーヨークワン」とはどうやら紅葉館のことらしい。芝の紅葉山に明治十四年に建てられた高級料亭で、その対照性からしばしば鹿鳴館と並び称されていた。鹿鳴館が政府や外国の要人を招いては夜会に興じる政府御用達の万事洋風

に對して、こちら紅葉館は文人墨客など風流人が交わる民間御用達で万事古雅。そして両者が競う「華」は、鹿鳴館が貴婦人たちの衣裳に對して、紅葉館は接客する女性たちの美貌。それは、新聞に「新柳二橋の一粒より絹ごしにしても得難き美姫」、すなわち花柳界の双壁である新橋と柳橋の芸者たちもはるかに及ばぬと書きたてられるほどだった。

当時はひたすら學問に没頭していた海旭の耳にもその評判は届いていたが、当時も今も海旭には最も遠い俗界の話だった。海旭は戸惑いを覚えながら答えた。

「たしかに、私は紅葉館の近くにある浄土宗の學寮で學んでおりました。いまでもそれは健在とは思いますが、學僧の卵の私にとつては縁なき俗の極致で……」と怪訝を隠しきれずに言いよどみ、一拍をおいて訊いた。「その紅葉館についてなにか……」

ハインリッヒから返ってきたのはさらに海旭を驚かす意外も意外な言葉だった。

「そのコーヨークワンを舞台にした金色の鬼女の物語が……」

金色の鬼女？ またまた何を意味しているか海旭は理解できず首をかしげた。

「姉崎によると評判の小説で、妻のミツコがそれを知りたがって……」とハインリッヒが援け舟を出した。

これで合点はいかぬがようやく推量がついた。「金色の鬼女」とはおそらく「金色夜叉」だ、尾崎紅葉が描いて話題を呼んでいる小説の題名だ。しかし、それにしてもなぜ、隠者然たる哲人伯爵が、美姫揃いで知られる日本の料亭と愛憎通俗小説に関心を抱くのか……。それに日本人妻がどう関わるのか……。海旭にはさっぱり合点がいかなかった。

実は後になって、それらが海旭と哲人伯爵をつなぐ深い因縁の糸であることが判明するのだが、いまの海旭はただただ混乱するばかりだった。

(この項つづく)

第四十七回

江戸を歩く



神田上水沿いを
関口大洗堰へ

森清鑑
大江戸ウォーカー

堀部安兵衛

中山（堀部）安兵衛たけつな武庸は、越後国新発田しばた藩家臣の長男として生まれたが、そのとき母親が出産後遺症で死に、父親に育てられる。やがてその父親も亡くなり、天涯孤児となり母方の親戚に引き取られる。十九歳で江戸に出て小石川の堀内正春道場に入門。ここで天賦の剣術の才は、ぱっと花開き、瞬く間に免許皆伝を取得、堀内道場一の高弟となる。堀内は直新陰流の達人で、当時、道場は江戸有数の剣術道場としての名声を得ていた。

そして元禄七年、高田馬場での仇討ち事件が起きる。事の発端は、同じ堀内道場の菅野六郎左衛門が遺恨試合に巻き込まれたことにある。菅野と安兵衛は叔父、甥の間柄。その菅野は以前に藩主御前試合で村上庄左衛門と手合わせ。見事に勝利する。ところが相手の村上は、あのとときの勝負は納得がいかないと遺恨を持つ。そして高田馬場での命を賭けた



◆散歩図1

決闘を申し込んできたのである。村上は一対一ではなく、ひそかに仲間数人を集め、菅野をだまし討ちにしても討ち取ろうと企てる。菅野はこのことをうすうす察知してはいたが、受けた以上は武士として敢然と闘おうと決意する。菅野が村上の果たし状を見たのは当日の朝。そこで彼は死の決意を持って安兵衛に別れを告げんと、馬場への行きがけに安兵衛の家に寄る。ところが安兵衛は留守である。そこで彼はいたしかたなく、事の次第を書き記した手紙を玄関に挟み、馬場に出向く。このとき、安兵衛は家とは別の場所ですでに酔いつぶれ、寝ていた。彼が家に戻ったときには、すでに陽は高く登っていた。菅野の文を読んだ瞬間、安兵衛は脱兎のごとく馬場に向かって駆けだした。牛込の武家町を抜け、一挙に穴八幡を目指す。間に合わないかもしれない。押っ取り刀で駆けつけてきて、猛烈にのどが渴いた。今という夏目坂の三叉路の角に一軒の酒屋があった。彼は店に飛び込み、一升枧

を仰ぐ。一息ついた安兵衛、馬場に通じる穴八幡沿いの坂道を駆け上がる。馬場に着くと決闘はすでに始まっていた。大勢の見物人が固唾をのんで見守っている。相手は三人だ。菅野は押されている。安兵衛、人垣をかき分けて、菅野に大声をかけると、乱闘場面に飛び込む。目も止まらぬ速さで白刃が舞い、あつという間に三人を切り倒す。これを見た聴衆がどよめく。実際の真剣勝負で数人を倒す



◆高田馬場

ということは大変なことなのである。高田馬場の決闘は、江戸の評判となり、安兵衛「十八人斬り」と喧伝された。

この様子の一部始終を見ていたのが堀部弥兵衛。安兵衛の武術と人柄に惚れ込み、養子になってくれと懇願する。かくて中山安兵衛は、堀部安兵衛と名を変え、やがて忠臣蔵四十七士の重要人物となるのである。

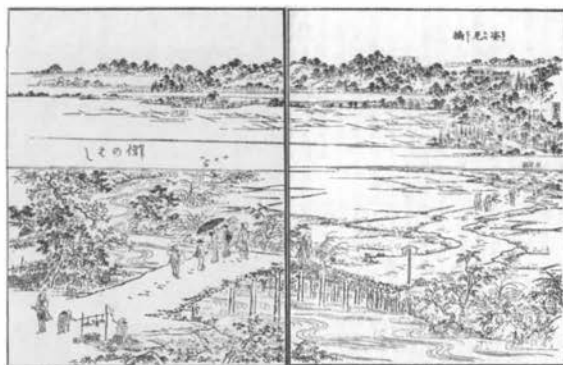
ところで安兵衛が駆けつけ一杯やったとされる酒屋が小倉屋で穴八幡側の夏目漱石生家、夏目坂入り口の左角に現在もあり、営業している。

面影橋、太田道灌

高田馬場のぐるりから北に通じる一本道がある。この道はやがて神田上水にぶつかる。田や畑の道だが、この辺りが太田道灌の逸話で有名な山吹の里である。道灌が鷹狩りに出てこの辺りで雨に遭う。貧弱な一軒の農家を見つけ、雨除けの簀はないかと問う。出てき

た少女が山吹の花を手折って捧げ、こう断る。「七重八重花は咲けども山吹の実の（簀）一つだに無きぞ悲しき」。道灌はこの言葉の意味がわからない。憤然として引き返す。帰って近臣にこのことを話すと、臣の一人が「恐れながらこの和歌は貧乏で簀ひとつないということですよ」。道灌、大いに恥じて以後和歌に精進したという有名な伝説である。

神田上水に架かる橋が面影橋である。長さ十二間余。広重も雪旦もこの橋の眺望を描いている。神田川の清流と眼前に展開する畑。想像を絶する自然の美しい光景がそこにはある。夏ともなれば螢が舞う。しかもこの辺り



◆江戸名所図会 神田上水に架かる面影橋。その手前が山吹の里、右端中央姿見の橋

の蜩は形が大きく、他所では見られぬ美しさであった。雪旦は遊山の橋を渡る日傘を差した三人の女性、前後に二人の男性を描く。いずれも橋から見渡す光景に見とれている。橋のたもとにキセルをくゆらす売り人が座り、亀をつるし、売っている。子供が二人、その亀を指さしている。橋を渡ってさらに行くと田園を流れる小川にぶつかる。神田川に平行して流れている。ここに架かる小橋が姿見の橋である。江戸の初期、この橋の袂には池があった。行人が橋の上から池を覗くと鏡のように自分の姿が映ったという。そこで姿見の橋。よほど美しい水面だったのであろう。

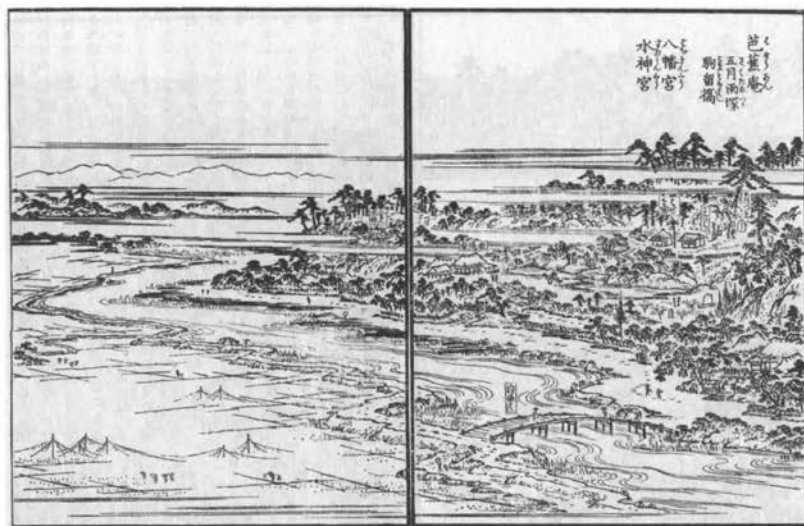
神田上水沿いを関口大洗堰へ 面影橋近辺

山吹の里から面影橋を渡る。この辺り、風光明媚だが夜ともなれば寂しい寒村である。夏には蜩が舞う。そんな情景を反映してか、怪談や弔いにまつわる、いくつかの噂が登場



◆散歩図2

する。落語「らくだ」は棺桶を担ぎ、落合の火葬場に行く道すがらこの橋を通る。「道灌」は山吹の里での太田道灌の逸話をもとに、分らず屋との会話で笑わせる。面影橋を渡ってちょっと行くと右手に真言宗南蔵院がある。三遊亭円朝はこの寺を舞台に怪談「乳房榎」を創作した。絵師菱川重信が天井画を委託され、もう少しで完成というところで無頼の弟子、浪江に誘い出され蜚の里でひそかに殺される。この時、浪江の片棒を担いだ重信の下男、正介は寺に駆け戻り、「先生が無頼ものに襲われ命を……」とアリバイ工作をするが誰も取り合わない。それもそのはず、死んだはずの重信が普段通り絵を描いているのではないか。最後の龍の片腕を描き、落款を押しているところであった。それを見て、正介たまげて腰を抜き大声を上げる。和尚一同が飛び出してくる。見ると部屋の手まりは消えている。灯明をつけて部屋に入ると、重信の姿がない。しかし、龍の片腕は見事に描き



◆江戸名所図会 水神社、芭蕉庵 ほぼ中央下に流れる神田上水と駒塚橋

上がり、押された落款はべつとりと濡れていた……という斬。この斬は歌舞伎でも有名な
なり、今日も演目となっている。

さらに北にちよつと歩くと砂利場村。この
辺り、砂利が豊富に採れたらしい。そして左
手が金乗院。戦後、目白不動がここに移され、
慶安事件で由井正雪とともに処罰された槍の
名人丸橋忠弥の墓もある名刹。雪旦は金乗院
前の急な宿坂を描く。江戸の前に、ここは昔
の奥州街道で宿坂の関があったという。坂を
上がり、さらに北に下高田村を行けば有名な
雑司ヶ谷鬼子母神に着く。

芭蕉庵

南蔵院寺域を通る小川に沿って南に下り、
再び神田上水に出る。川沿いに東に歩くと、
左、北側は丘が迫り上がっており豊かな緑。
右は下戸塚村から関口村の平らな田畑が広が
っている。何という美しい景色か。やがて丘
の中腹、木々の間に小さな社が見える。これ

は上水の守護神を祀る水神社と椿山八幡宮で
ある。そしてその近くに芭蕉庵がある。上水
沿いの道から簡素な門を潜って上がると、左
手に水神社の別当、の素朴な社があり、木々
を潜ってさらに登ると芭蕉堂がある。上水の
これから先にある堰堤の改修工事を担当した
のが伊賀上野の藤堂家。芭蕉も伊賀上野出身。
旧家の縁で芭蕉もこの工事に従事した。とこ
ろが上水を見下ろし、早稲田田圃一望のこの



◆広重「せき口上水端ばせを庵椿やま」絵の中
央右、竜臨庵。上水の左下先に大洗堰がある。

景色があまりにも美しく、芭蕉はすっかり魅了されてしまった。彼は竜隠庵に住み込み、眼下に流れる上水に架かる駒塚橋（駒留橋）を近江の瀬田に似ているとして「五月雨に隠れるものや瀬田の橋」と詠んだ。後に弟子の手で建てられた芭蕉堂の右手にこの句を刻んだ五月雨塚が立っている。この辺りの光景は雪旦、広重がリアルに描いている。

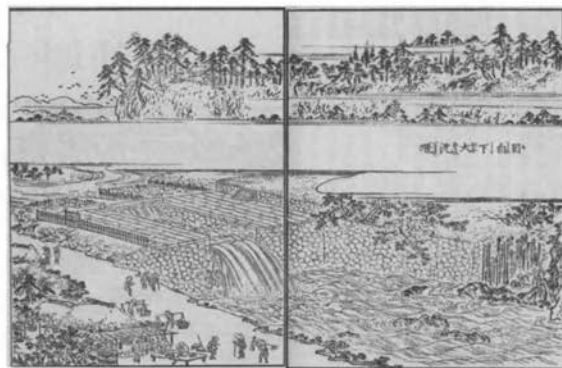
神田上水

ここを過ぎると、黒田淡路守（千葉三万石）の中屋敷。辺り一帯は椿の名産地で椿山と呼ばれた。明治になってここに山形有朋が棲み、庭園を造り、椿山荘と名付けた。その隣が蓮華寺で、その前に上水の大洗堰があった。滔々と流れてきた水はここで神田上水と江戸川に分かれる。高い石垣が築かれ、上水の水はさらに浄化される。道は駒塚橋を渡って南沿いに変わる。道行く人々が立ち止まり、洗い堰から勢い良く流れ落ちる様を見ている。

雪旦の絵はリアルに当時の情景を伝えている。ここも江戸の名所であった。

蓮華寺の隣が大目付柳生播磨守の下屋敷。柳生氏といえば、柳生新陰流の祖、石舟斎や家光に仕えた但馬守を輩出した剣豪一族。特に宗矩の政治的影響力は大きく、徳川幕藩体制を固める礎を築いた。

家光が余興で虎の檻に宗矩を入れる。居並ぶ大名を尻目に彼は寸分の隙無く虎に挨拶し、戻る。虎はじつとしてゐる。剣で鍛えた剛胆の人でもあった。息子十兵衛三嚴、尾張柳生の利嚴、その子連也斎と徳川家御流、天下の剣を築いた。柳生家は千百石ながら大目付として睨みを効かせた。



◆江戸名所図会 目下大洗堰

目白不動

この柳生下屋敷の隣が目白不動である。しかしここへお参りするには上水からは登って行けない。さらに東へ歩いて江戸川と上水を渡ってすぐの音羽町大道を左に折れ、上水に沿って元に戻る。と、すぐに目白坂と呼ばれる急な段々の坂があり、ようよう表門にたどり着く。門を潜ると境内の広場。右手に鐘楼、左手に茶屋が立ち並んでいる。鐘楼は時の鐘で近隣一帯に時を告げた。本堂の裏には豪勢な別当棟が並ぶ。全体が高台にあり、眼下に早稲田の田圃が広がり、遠方には山が連なっている。雪旦はこの情景をリアルに描いている。目白不動といえは、江戸五色不動の中でも目黒不動に次いで有名。江戸っ子はこぞって坂を登り、参詣した。三代家光は目白、目赤、目黒、目青、目黄を五色不動として指定、江戸鎮守を祈願。もともと不動明王は大日如来の民衆救済具現者とされ、宇宙現象の地、

水、火、風、空を不動の体五色で表現。この風習はすでに平安時代からあり、江戸五色不動は目の色で表しているという。不動信仰の隆盛がそのまま地名として今日残っている。目黒や目白である。この有名な目白不動が戦災で消失。前述の金乗院に移転した。



◆江戸名所図会 目白不動堂。左下目白坂、右下不動坂。左上早稲田の田圃。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

●阿

あずまや

〔特選〕
四阿に水打つ音や萩の園

井村善也

萩の季節が来て人が押しかけてくる。当然

四阿への出入りも多くなる。静かな時を見計らって水を打つ。この句、何度も読み返してみてほしい。上の句から中へ、中の句から下の句への流れが、句の中身を助けている。

〔佳作〕

夜の秋うなじやさしき阿弥陀仏

斉田 仁

阿も咄も耐えておるなり猛暑なり

長谷川裕

猿の群れ阿修羅の如く柿奪つ

石原 新

●経

〔特選〕
経を読む声の高低蝉しぐれ

増田信子

本堂での僧侶のお経と見ても、家庭でのことと見てもよい。読経は一本調子のように、リズムも高低もある。それを何となく聞いて

いる。蝉しぐれはなかなかの一本調子だろうか。つくつくぼうしの高低だろうか。

〔佳作〕

隣り家の老婆経読む今朝の秋

佐藤雅子

経蔵の錠青錆びて蟬時雨

富永那美子

写経の字滲みて浮かぶ秋湿り

浜口佳春

●自由題

〔特選〕
神の池亀を眺めて涼給う

黄瀬 鴻

亀を捕らえてくると、神社の池に放すという風習を聞いたことがある。この池はどうか。池のほとりに立つて、石の上に甲羅を干す亀や泳いでいる亀を見ている。木立の陰で涼しいが、これは神が授けて下さるものだ。

〔佳作〕

日盛りの蔵王嶺仰ぎ松手入れ

佐藤雅子

つばやきのように金魚の泳ぎけり

村田 篠

らんちうの頭重たき大暑かな

井口 栞



誌上句会 〈編集部選〉

■阿

阿羅漢の義父の命日秋の声
身の中の阿修羅は消えて秋澄める
阿修羅像合せる手にも汗が垂れ
手も足もばらばらにする阿波踊り
阿刺比重の文字は右から読む猛暑
一山は阿弥の系譜や黒揚羽
阿部一族五徳十能百日紅
避暑地にて阿房列車を一読す
夏草の阿鼻叫喚で刈りにけり
折りとりて世阿弥を気取る夏座敷

佐藤雅子
當間あさ子
森 懐人
小林苑を
工藤 掉
内藤隼人
遠藤ゆかり
河合美佐子
小野徳治
守谷達彦

■経

経糸の矢筈薄が似合う義母
昼下り読経の響き聞こえきて
廻廊に夏猫五匹経を聴く
経験の泪色なる青野かな
経緯は言えず慙愧の髪洗う
夕立を吸わせて今朝の経済欄
ときを経ていま憎からず沙羅の花
青空ほどの経験を積み夏である
経師屋の軒朽ちておる夏の暮
佳き風も扇子の般若心経も

當間あさ子
森 懐人
飯島英徳
遠藤ゆかり
内藤隼人
近 恵
鈴木真理子
村田 篠
新島敦子
永井朋子

■自由題

長き夜行方知らずの猫探し
おとこえし色香なくとも手折りけり
風鈴を特備の札が鳴らしおり
日盛りの坂のぼるとき下を向く
見送るも見返るもまた秋の坂
白昼のくらがり揺れるさすべり
サイダーの泡のようだと呟けり
三伏の眼に菊薊とレンズかな

森 懐人
當間あさ子
工藤 掉
近 恵
斉田 仁
長谷川裕
湯谷 修
遠藤ゆかり

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

子規自由題

締切・二〇二二年十一月二十日
発表・『浄土』二〇二三年一月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

95 かい目 さっちゃんはネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



水月を見るも楽しき猫を抱く

岱潤

今年五月、金環日食のあった翌日の『天
声人語』におもしろい話が載っていた。
『太陽と月とどちらが大切でしょうと聞
く先生に生徒が答えていく。月です。
月は闇夜を照らしてくれませんが、太陽は
もともと明るいところを照らすだけで
す。』『世界ジョーク事典』に見つけた笑
話だそう。筆者は何のコメントも寄せ
ていなかったが、私はとても心に残り、
今年の法話にぜひぶん使わせてもらった。
西洋では確かに月はあまりよいイメー
ジはないようで、この話はジョークにな
ってしまうのだから、アジア、特に日

本では少なくともジョークにはならな
い。東京だけでなく、京都や、山形でも
この話をしたが、皆さん一様に頷いて
いただいた。そして、誰もが深いなと言
って下さる。だからこそ法然上人は、よ
く阿弥陀仏を月にたとえておっしゃった
のだろうと思う。

私の大好きな言葉に「一つの月が万水
に浮かぶ、水の浅深を嫌うことなく」が
ある。阿弥陀仏は私たちの才能や努力や
まして結果など少しも差別することな
く、平等に光を当ててくださっている。
そんな風にこの言葉を理解したら言い過
ぎなのだろうか。努力主義よりも仏の慈
悲を絶賛することが、法然上人の心に帰

ることのように思う。

これから寒さが厳しくなり、空が澄ん
で月が益々きれいに見える時期になる。
たまには月を見ながら飲むのも、悪くな
い。(長)

編集スタッフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十八巻十一月号 頒価六千円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十四年十月二十日
発行 平成二十四年十一月一日

発行人 佐藤良純
編集人 大室了昭

印刷所 株式会社 シーディーイー
〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・四明開会館内
発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
衆原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪

お茶の美老園鹿児島

11月は、お茶の正月といわれる炉開きの季節です。

開炉の時期を、利休は「柚子の色づくころ」といわれ、冬に向かう準備です。緑茶がもっとも美味しくいただける季節でもあります。

緑茶を茶器に注いだときの緑色の水色、口の中に広がる香り、飲んだ後に残る香り、旨味や渋味、苦味、甘味を構成する滋味の茶の内質と、茶葉の外観の形状や色沢で、緑茶の評価が決まってくるそうです。この全てを満たしてくれる鹿児島の『お茶の美老園』の緑茶を、紹介します。

『お茶の美老園』は明治37年、薩摩藩主・島津藩発祥の地、都城で創業。現在は鹿児島市一の繁華街の天文館近くにあります。

120年余り、知覧、霧島、瀬戸、大根占それぞれの産地の特性を活かし、「齢を重ねてさらに美味なるひとしづく」のお茶ひとすじのお店です。

【お薦めの緑茶】

さつまほまれの『特選鳳香』玉露のような旨みの最上煎茶 瑞々しい若芽の馥郁とした香り品評会茶のコンクと旨みが特長 100g 2100円

『特選鳳苑』鹿児島県内の優良産地の旬の茶葉を厳選 芳ばしい香りのまろやかな旨味の味わいが特長 お湯の温度あまり気にせずに飲めます。 100g 1050円

『あさつゆ』天然玉露とよばれる希少品 知覧産 甘い栗のような風味。 100g 1365円

鹿児島市中町52
099-226-344125



鳳香の茶葉

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



幸浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より